

Title	ティディム・チン語の中動態標識ki ³ - に関する覚書
Author(s)	大塚, 行誠
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 153-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90950
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ティディム・チン語の中動態標識 ki^3 - に関する覚書

大塚行誠

A note on the middle marker ki^3 - in Tiddim Chin

OTSUKA Kosei

Abstract: This paper aims to describe the morphosyntactic features and basic usages of the middle voice marker ki^3 - in Tiddim Chin, a northern Kuki-Chin language of the Tibeto-Burman linguistic family. In Tiddim Chin, verbs with the prefix ki^3 - express reflexivity, reciprocity, and other linguistic features typically found in the category of middle voice (Kemmer 1993). Based on written texts and interviews with a native speaker, this primary report seeks to elucidate the grammatical conditions wherein the prefix ki^3 - occurs in the narrative style (Henderson 1965) of modern Tiddim Chin.

キーワード：チベット・ビルマ語派, チン語支, 中動態, 再帰, 相互

1. はじめに

ティディム・チン語¹⁾(ISO 639-3: ctd) はチベット・ビルマ語派のチン語支に属する (西田 1989: 995)。Ethnologueによると, ミャンマー連邦共和国北西部のチン州とザガイン管区域, インド共和国北東部のアッサム州, マニプル州, ミゾラム州を中心に約411,000人の話者がいる (Eberhard et al. 2019: 119, 258)。

ティディム・チン語には接頭辞 ki^3 - という中動態標識がある。中動態標識は, ラワン語 (LaPolla 2000), キナウル語 (Takahashi 2012), ポー・カレン語 (Kato 2019) 等の一部のチベット・ビルマ語派の言語にも見られる。ティディム・チン語と同系統のライ語²⁾(ISO 639-3: cnh) にも中動態標識があり, 基本形式の $?ii$ -(MM) をはじめ, $?aa$ -(3SG.MM) や kaa -(1SG.MM) 等, 主語の人称と数によって異なる形式が用いられる (Smith 1998: 5)。本稿では, 文語体のティディム・チン語における中動態標識 ki^3 - の形態統語的特徴と主な用法について述べる。

1) 英語では“Tiddim Chin” (Henderson 1965) または“Tedim Chin” (Zam Ngaih Cing 2017) と表記する。

2) チン語支に属する言語であり, 英語では“Hakha Chin” または“Hakha Lai”と表記する。

本稿の構成は次の通りである。§1.1でティディム・チン語における口語体と文語体の違いについて述べ、§1.2では文法の概要として、語順と格標示、人称標示、動詞語幹形式の交替の3点を取り上げる。そして、§1.3では接頭辞 ki^3 - に関する先行研究、§1.4では調査の方法を示す。2章で接頭辞 ki^3 - の形態統語的な特徴について述べ、3章ではその再帰用法 (§3.1)、相互用法 (§3.2)、動作主非表示の用法 (§3.3) について記述する。4章は本稿のまとめである。

1.1. 文語体と口語体

ティディム・チン語の話者は、物語の語りやフォーマルな文章では文語体 (narrative style)、家庭内の日常会話など、カジュアルな場面では口語体 (colloquial style) を用いるのが一般的である (Henderson 1965: 2)。文語体と口語体の音韻と語彙はほぼ同じだが、人称やモダリティの標示方法等、各文体で文法がやや異なっている。本稿では文語体のティディム・チン語を主な考察の対象としているが、中動態標識 ki^3 - の働きが文語体と口語体との間でどのように異なっているのかということについては、現調査段階で明らかになっていない。

1.2. 文法概要

以下、§1.2.1 語順と格標示、§1.2.2 人称標示、§1.2.3 動詞語幹形式の交替について論じる。

1.2.1. 語順と格標示

ティディム・チン語の基本語順は自動詞節の場合 SV(例(1)参照) であり、他動詞節の場合 APV(例(2)参照) である。述部が文末に来るという制約は比較的強い。能格型の格配列を示し、基本的に名詞句に格助詞を後置することで様々な格が標示できるほか、声調交替で格を標示する場合もある (Henderson 1965: 69-71)。

(1) mi^1hiq^2 gan^2hiq^2 $tam^1pi:1$ a^2 $si:2$ $hi:3$
 human.being animal many 3 die¹(vi) COP¹

「多くの人や動物が死んだ。」(ZS001: 25)

(2) sa^1ham^1 in^3 $\eta a^1sa:1$ a^3 $ne:1$ $hi:3$
 otter ERG fish 3 eat¹(vt) COP¹

「カワウソが魚を食べた。」(ZS001: 23)

1.2.2. 人称標示

文語体において、人称は人称代名詞、人称接語、方向接辞の来辞 $hoŋ^1$ -/ $oŋ^1$ - で表す。人称接語には一人称複数包括形の人称接語 i (i^1 / i^2 / i^3)、一人称複数包括形以外の一人称を表す人称接語 ka (ka^1 / ka^2 / ka^3)、二人称を表す人称接語 na (na^1 / na^2 / na^3)、三人称を表す人称接語 a (a^1 / a^2 / a^3) があり、各声調は後続要素の声調によって決まる。これらの人称接語を名詞句の前に置く

と所有者の人称を表し、述部動詞の前に置くと主語の人称を表す³⁾(例(3)参照)。

- (3) $na^3 ta:1 mi^1gi:1 ka^1 sa:3 hi:3$
 2 son kind¹ 1 deem¹ cop¹
 「あなたの息子は優しいと私は思う。」(ZS000: 16)

一人称複数包括形の人称接語 i ($i^1/i^2/i^3$) で複数を示す場合を除き、複数の人称を表すには、以下の例(4)のように、複数の人称を表す人称接語 u^3 を名詞句(例(4)の $xe:3$ 「足」)または述部動詞(例(4)の $si:k^1$ 「踏む」)の後に置く。但し、例(1)のように述部動詞の主語が複数であっても人称接語 u^3 を用いない場合もある。

- (4) $xa^3pi^1-tuŋ^1 a^1 xe:3 u^3 to^3 a^3 si:k^1 u^3 hi:3$
 moon-above 3 foot PL COM 3 tread.upon¹ PL COP¹
 「月面を彼らの足で彼らは踏んだのである。」(ZS002: 35)

ティディム・チン語には目的語の人称を表す人称接語が無い。但し、目的語が一人称または二人称である場合、すなわち、被動者や受領者等に発話行為参与者(speech-act participant)を含む場合、来辞の $hoŋ^1$ - または $oŋ^1$ - を動詞の前に義務的に付加する⁴⁾(例(5)参照)。

- (5) $a^3pua^1lam^1 a^3 hoŋ^1- ŋa:k^1 u^3 hi:3$
 outside LOC 3.VEN- wait¹ PL COP¹
 「[彼女たちが³] 外であなたを待っている。」(ZS004: 64)

1.2.3. 動詞語幹形式の交替

1つの動詞が2つの語幹形式を持つという形態的な特徴がチン語支の諸言語で報告されている(Hillard 1974, 西田 1989, Matisoff 2003, VanBik 2009)。ティディム・チン語の多くの動詞にも「形式 I (Form I)」と「形式 II (Form II)」と呼ばれる2つの語幹形式があり、形態統語的な条件によって語幹形式の交替が起こる。

通常、主節の述部動詞は形式 I で現れることから、形式 I が動詞の無標の形式であると考えられる。一方、有標の形式 II は名詞的な従属節の中で見られるほか、動詞によっては名詞化(例(6)b.参照)や他動詞化(例(7)b.参照)等の機能を担っている場合がある。

3) 但し、三人称の主語を表す場合、人称接語 a ($a^1/a^2/a^3$) はしばしば省略される。

4) $hoŋ^1$ - と $oŋ^1$ - のどちらも来辞としてほぼ同じ機能を持つ。 $hoŋ^1$ - は文語体で使う傾向が強く、 $oŋ^1$ - は口語体でよく使うとコンサルタントは指摘している。来辞についての詳細は Otsuka (2022: 201-205) を参照されたい。

- (6) a. pa:u² 「話す」
 speak^I (Vul Za Thang & J. Gin Za Twang 1975: 95)
- b. pa:u³ 「言葉, 話」
 speak^{II} (Vul Za Thang & J. Gin Za Twang 1975: 95)
- (7) a. a² dam² hi:³ 「彼は治った。」
 1 be.healed^I COP^I (Henderson 1965: 83)
- b. (a¹maʔ³) a¹ dam³ hi:³ 「(彼を) 彼は治した。」
 3SG 3 be.healed^{II} COP^I (Henderson 1965: 83)

ライ語では中動態が動詞語幹形式の交替にも関連している為、Smith(1998) はライ語の中動態標識と動詞語幹形式との関係についても記述した。しかし、ティディム・チン語における中動態標識 ki³- と動詞語幹形式の交替との直接的な関連性は現調査段階で確認できていない。

1.3. 先行研究

Henderson (1965) は、ki³-sa:t¹ {MM-hit^I} 「自分を打つ」(例(8)a.参照)、ki³-i:t¹ {MM-love^I} 「互いに愛し合う」(例(8)b.参照)、ki³-ci:³ {MM-say^I} 「言われる」(例(8)c.参照)の例を挙げ、接頭辞 ki³- を付加した動詞は、英語では受身 (passive) や再帰 (reflexive) の表現として訳すことができる」と述べた。但し、ki³-sa:³ (MM-deem^I) 「思われる」や ki³-kou¹ (MM-exclaim^I) 「叫ぶ」等、受身や再帰の表現で訳出されないものもあるとしている (Henderson 1965: 99)。

- (8) a. ka¹ ki³-sa:t¹ xa:¹ 「私はうっかり自分を打ってしまった。」
 1 MM-hit^I by.mistake^I (Henderson 1965: 99)
- b. ki³-i:t¹ ni:³ 「互いに愛し合おう。」
 MM-love^I IPL.INCL.IRR (Henderson 1965: 99)
- c. a¹ ki³-ci:³ hi:³ 「言われている。」
 3 MM-say^I COP^I (Henderson 1965: 99)

Zam Ngaih Cing (2017) は、結合価減少の操作に関わる接辞として再帰接辞 ki³- を挙げた。再帰接辞 ki³- は再帰用法や相互用法を持つほか、Palmer (1994: 117) の言う「動作主を伴わない受動 (agentless passive)」を表すこともあると具体例(9)と共に述べた。

- (9) a. ciŋ²nu:¹ in³ an¹ huan¹
 PSN ERG food cook^I
 「Cing Nu <人名> はご飯を作った。」(Zam Ngaih Cing 2017: 186)

b. an¹ ki³-huan¹

food REFL-cook¹

「ご飯が作られている。」(Zam Ngaih Cing 2017: 187)

ティディム・チン語の接頭辞 ki³- と形式や機能の面でよく似た接辞は周辺言語にも見られる。例えば, Davis (2017) の報告によると, ティディム・チン語と系統的に近い関係にあるシイン語⁵⁾ (ISO 639-3: csy) には ki: という中動態標識があり, 相互や受身を表す。Peterson (2022) はティディム・チン語やシイン語のほかにも, その周辺地域で話されている様々な言語に似たような形態の中動態標識があることに着目し, それらが共通の祖語における語根 *kiir ‘return’ 「戻る」に関係すると指摘した。この「戻る」にあたる形態素は, Van Bik (2009) によるクキ・チン祖語 (PKC) で言えば *kiir ‘RETURN’ (Van Bik 2009: 115) にあたり, 現代ティディム・チン語における ki:k¹ 「戻る」や ki:k¹ 「再び～する」(Henderson 1965: 151) にあたるものである。

1.4. 調査方法

文語体のティディム・チン語で書かれた言語資料を基に, コンサルタントへの聞き取りも随時行いながら中動態標識 ki³- の形態統語的な特徴と主な用法を調べた。

本調査で使用した言語資料は, (a) Henderson (1965) に掲載されているティディム・チン語の例文, (b) Vul Za Thang & J. Gin Za Twang (1975) のティディム・チン語辞書, (c) ティディム・チン語学者 H. Gin En Cin 氏の監修のもとティディム・チン語読本委員会 (Zolai Simbu Komiti) が発行した幼稚課程および小学課程向けの初等読本 5 冊である。

メイン・コンサルタントは 1980 年代後半生まれのチン州ティディム (Tedim) 出身の男性, パウシアンリアン氏 (Pau Sian Lian) 氏である。氏は母語であるティディム・チン語のほかにはビルマ語と英語の運用能力も高く, ティディムの文化と社会に関する豊富な知識も有している。パウシアンリアン氏への聞き取り調査で得たデータには (PSL) と記してある。

2. 形態統語的特徴

2.1. 接頭辞 ki³- が現れる位置と付加する語のタイプ

接頭辞 ki³- は基本的にホストとなる形態素の直前に付加し, 人称接語や方向接辞 (§1.2.2) よりもホストとなる形態素に近い位置に現れる。例 (10) の接頭辞 koŋ¹- は, 一人称の人称接語 ka (ka¹/ka²/ka³) と来辞 hoŋ¹-/oŋ¹- の融合形 (Henderson 1965: 112-113) である。この例文から, 「人称接語—来辞 (方向接辞)—中動態標識としての接頭辞 ki³—ホストとなる形態素」の順序

5) チン語支に属する言語であり, 英語では “Siyin Chin” または “Sizang Chin” と表記する。

で現れることが分かる。

- (10) ka¹ la:i³bu:1 to² de:ŋ² di:ŋ¹ in² koŋ¹- (<ka³ + hoŋ¹) ki³-t^ho:i¹ hi:³
 I book COM throw.at¹ PURP CNJ 1.VEN- (<I + VEN) MM-search.for¹ COP¹
 「私の本を君に投げつけようと準備していたんだ。」 (ZS003: 33)

接頭辞 ki³- は動詞に付加することが多いが、一部の名詞に付く場合もある。例えば、人間関係 (例(11)の名詞 u:²na:u² 「兄弟姉妹」参照)、時間や場所の間隔 (例(12)の名詞 ka:l² 「間」参照) など、一部の相互関係性を表す名詞の前に接頭辞 ki³- を付加することがある。

- (11) pa³sal¹ zi:² ki³-u:²na:u² te:¹ nu³phal¹
 husband wife MM-siblings PL *nuphal*
 「妻同士が互いに姉妹関係にある男性, Nuphal。」 (ZS001: 50)
- (12) in¹tual² le² in¹ka:² ki³-ka:l² a² suan¹-p^ha² a³ om¹ hi:³
 forecourt CNJ platform MM-in.between LOC stone-spread(inv.) 3 exist¹ COP¹
 「前庭と露台の間には敷石がある。」 (ZS002: 13)

「1」の数を表す名詞 xat³ に接頭辞 ki³- を付加すると、「同一だ」という意味になる (例(13) a. 参照)。これと同様の派生はライ語にも見られ、ライ語で「1」を意味する形態素 khat に中動態標識を付加すると「同一だ」という意味の動詞になる (Smith 1998: 13)。但し、Smith(1998)によると、ライ語では「1」を意味する形態素 khat は名詞のほか動詞としての特徴も持ち、2つの語幹形式 (形式 I : khat / 形式 II : kha²) もある。その為、名詞的特徴しか持たないティディム・チン語の名詞 xat³ 「1」とは文法的な性質が異なる。なお、例(13)の b. から d. に示すように、接頭辞 ki³- と名詞 xat³ 「1」の間に他の名詞を挿入することで、「同一の～」という意味の複合名詞を作ることできる。

- (13) a. ki³-xat³ b. ki³-xo¹-xat³ c. ki³-sa:ŋ¹-xat³ d. ki³-zum³-xat³
 MM-one MM-village-one MM-school-one MM-office-one
 「同一」(PSL) 「同郷」(PSL) 「同窓」(PSL) 「同僚」(PSL)

名詞と動詞からなる複合動詞では、その名詞要素と動詞要素の繋がりが強ければ強いほど、名詞要素のほうに接頭辞 ki³- を付加する傾向がある。例えば、例(14)の名詞 min² 「名前」と動詞 t^haq² 「よく知られた」から成る複合動詞 min²-t^haq² 「有名だ」の場合、接頭辞 ki³- は動詞要素ではなく、名詞要素 min² 「名前」のほうに付加する。このほか、ki³-luŋ²-tuak¹ {MM-heart-meet¹}

「心を一にする」(Vul Za Thang & J. Gin Za Twang 1975: 52) 等の例もある。

- (14) a¹ gou³ t^huap¹ zou¹ te:¹ ki³-min²-t^haj²-sak³ ma[?]ma[?] hi:³
 3 kill^I extra^I accomplish^I PL MM-name-famous^I-CAUS very.much COP^I
 「[ミタン牛を] より多く屠ることができた者たちは大変有名になった。」(ZS004: 63)

以下の例(15)の述部動詞 ki³-si:k¹ は「後悔する」という意味を持ち、形式上は接頭辞 ki³-が含まれている。しかし、動詞 si:k¹ は例(4)のような「踏む」という意味しかなく、ki³-si:k¹「後悔する」と si:k¹「踏む」との間の意味的な関係は不明である。本稿ではこのように共時的な派生関係がよく分からない動詞や、対応する無標形式を持たない動詞 (deponent verb, Kemmer 1993: 22) を考察の対象から外すことにする。

- (15) a³ nu:¹ t^hu:¹ maŋ² lou³ a:² tu:³-bu:k¹ suŋ² pan³ a¹ ta:i³ xiat¹
 3 mother matter obey^I NEG^I CNJ sheep-nest inside ABL 3 run^{II} away.from^{II}
 a¹ ki³-si:k¹?/ki³si:k¹? hi:³
 3 MM-tread.upon^I?/repent^I? COP^I
 「母の言いつけに従わず、羊の住処の中から逃げ出したことを後悔した。」(ZS002: 40)

2.2. 接頭辞 ki³- と項の増減

本節では、項の増減から見て、接頭辞 ki³- が項を減らす操作に関与していることを示す。

[1] 項を増やす操作

項を増やすにはいくつかの方法がある。チベット・ビルマ祖形にあった初頭音の有気と無気の対立を基に、自動詞語幹と他動詞語幹を弁別する手順が伝承されていると考えられるもの(西田 1989: 1001) もごく一部の動詞に見られるが、決して生産的ではない(表 1 参照)。

表 1 頭子音の無気と有気の対立による自他動詞対

自動詞語幹 (形式 I・無気)	他動詞語幹 (形式 I・有気)	参照
pu:k ¹ 「倒れる」	p ^h u:k ¹ 「倒す」	(Henderson 1965: 22)
kia ³ 「落ちる」	xia ³ 「落とす」	(西田 1989: 1001)

先の §1.2.3 でも述べた通り、一部の動詞では動詞語幹の形式 II 自体に他動詞化の機能がある(例(7)参照)。但し、形式 I が自動詞 (intransitive verb) または単一他動詞 (monotransitive verb) で、その形式 II がそれぞれに対応する単一他動詞または二重他動詞 (ditransitive verb) となっている対の例(表 2 参照) は限られており、あまり生産的ではない。

表2 動詞語幹の形式Iと形式IIの対立による自他動詞対

自動詞 (形式I)		単一他動詞 (形式II)		参照
dim ¹	「満ちる」	dim ³	「満たす」	(Henderson 1965: 83)
単一他動詞 (形式I)		二重他動詞 (形式II)		参照
lam ¹	「稼ぐ」	lam ³	「稼いでやる」	(Henderson 1965: 83)

一方、接辞の付加によって項を増やす派生法は生産性が高い。代行態⁶⁾(substitutive)をはじめとした「影響を受ける対象 (affected object)」の項を増やす他動詞化接尾辞 -sak³ (例(16)b.参照)、随伴態⁷⁾(comitative)を表す他動詞化接尾辞 -pi²³ (例(17)b.参照)、放置態⁸⁾(relinquitive)を表す他動詞化接尾辞 -san³ (例(18)b.参照) など、いわゆる適用態標識 (applicative marker) を形式IIの動詞語幹の後に付加することによって節中の項が1項増える。接尾辞 -sak³の付加によって増えた項は受益者や被害者、被代行者 (例(16)b.参照)を表し、接尾辞 -pi²³の付加によって増えた項は随伴者 (例(17)b.参照)、接尾辞 -san³の付加によって増えた項は被放置者 (例(18)b.参照)をそれぞれ意味する。

- (16) a. ka² ni:² in³ a³ sam¹ a³ hiat¹ hi:³
 1 paternal.aunt ERG 3 hair 3 comb¹ COP¹
 「私のおばは (自分の) 髪を梳いた。」(PSL)
- b. ka² ni:² in³ ka³ nu:³ sam¹ a¹ hiat³-sak³ hi:³
 1 paternal.aunt ERG 1 mother.OBL hair 3 comb^{II}-AFF COP¹
 「私のおばは (私の母の代わりに) 私の母の髪を梳いてあげた。」(ZS001: 35)
- (17) a. ga:l²ka:p¹-ma:ŋ²pa:¹ a² pai² hi:³
 soldier-officer 3 go¹ COP¹
 「将校は行った。」(PSL)
- b. ga:l²ka:p¹-ma:ŋ²pa:¹ in³ sum²bu:k¹-pa:³ ta¹pa:³ a¹ pai³-pi²³ hi:³
 soldier-officer ERG shop-male.OBL son 3 go^{II}-COM COP¹
 「将校は店の主人の息子を連れて行った。」(ZS004: 71)
- (18) a. a³ pa:¹ si:² a:² ...
 3 father die¹ CNJ
 「彼の父親が死んで…」(PSL)

6) ライ語において“affected object (benefactive/malefactive/substitutive)”「影響を受ける対象」の項を加える接辞 -piak (Peterson 1998: 96-97) と用法が似ており、筆者はそのうちの“substitutive”を「代行態」と訳した。

7) ライ語における“comitative”「随伴態」の接辞 -pii (Peterson 1998: 98) と用法が似ている。

8) ライ語における“relinquitive”「放置態」の接辞 -taak (Peterson 1998: 100-101) と用法が似ている。

- b. a³ pa:¹ in³ (a³ ta¹pa:³) si²-san³ a:² ...
 3 father ERG 3 son die^{II}-RELINQ CNJ

「彼の父親が³ (息子を) 残して死んで…」 (ZS004: 32)

使役態では主に形式 I の動詞語幹が項の増加に関わる。使役表現は、名詞的な従属節の中にある場合など、形態統語的な条件上形式 II のほうが選択される場合を除き、形式 I の動詞語幹の後に使役の接辞 -sak³ を付加して表す (例 (19) 参照)。使役の接辞 -sak³ と先に述べた代行態を表す接辞 -sak³ は同一形式である (例 (16)b. と (19)b. 参照)。つまり、接辞 -sak³ が代行態と使役態のどちらを表しているのかは、その接尾辞が付いている動詞語幹の形式によって判断しなければならない。

- (19) a. pum³pi:¹ suŋ² siaŋ²thou² in² si¹-pai³ ma:n² hi:³
 body inside clean^I CNJ blood-go^{II} right^I COP^I

「体の中がきれいいで、血の巡りが良い。」 (PSL)

- b. *Vitamin C* in³ pum³pi:¹ suŋ² siaŋ²thou²-sak³ in² si¹-pai³ ma:n²-sak³ hi:³
Vitamin C ERG body inside clean^I-CAUS CNJ blood-go^{II} right^I-CAUS COP^I

「ビタミン C は体の中をきれいにして、血の巡りを良くする。」 (ZS004: 50)

[2] 項を減らす操作

接頭辞 ki³ は他動詞から自動詞を派生する逆使役化のプロセスに参与している。以下の表 3 に Haspelmath (1993) が通言語的調査の結果をもとに提唱した 31 の自他動詞対のリストと、それに概ね対応すると考えられるティディム・チン語の自他動詞対を示す。このリストでは、各動詞対の派生関係を 5 種類に分類し、自動詞から他動詞が派生されるものを「使役化型 (causative)」、他動詞から自動詞が派生されるものを「逆使役化型 (anticausative)」、自他動詞の両方が同一形式から派生されるものを「両極型 (equipollent)」、自他動詞対に形式上の派生関係が無く、自他動詞が異形のもを「補充型 (suppletive)」、自他動詞がどちらも同じ形式のもを「自他両用型 (labile)」とした。派生関係を通言語的に見ると、表 3 のリストの上位に向かうほど使役化の傾向が強くなり、下位に行くほど逆使役化の傾向が強いと Haspelmath (1993) は主張している。ティディム・チン語の場合も、表の下方、つまり逆使役化の強い傾向のほうに接頭辞 ki³ を付加した動詞が多く現れていることから、Haspelmath (1993) の示す傾向に概ね沿っていると言える。

表3 Haspelmath (1993) のリストに基づく自他動詞 (31対) の派生パターン⁹⁾

動詞	自動詞	他動詞	派生関係
1. 沸く／沸かす (boil)	sou ²	sou ² -sak ³	使役化
2. 凍る／凍らす (freeze)	xal ³	xal ³ -sak ³	使役化
3. 乾く／乾かす (dry)	keu ²	keu ² -sak ³	使役化
4. 起きる／起こす (wake up)	t ^h ou ¹	p ^h oŋ ³	補充
5. (火) 消える／消す (go out/put out)	(mei ¹)mit ³	(mei ¹)p ^h el ³	補充
6. 沈む／沈める (sink)	tu:m ³	tu:m ³ -sak ³	使役化
7. 教わる／教える (learn/teach)	sin ¹	hil ³	補充
8. (氷) 溶ける／溶かす (melt)	(tu:i ¹ xal ³)tu:i ¹	(tu:i ¹ xal ³)tu:i ¹ -sak ³	使役化
9. 止まる／止める (stop)	xo:l ²	xo:l ² -sak ³	使役化
10. 回る／回す (turn)	ki ³ -pei ²	pei ²	逆使役化
11. (塩) 溶ける／溶かす (dissolve)	tu:i ¹	tu:i ¹ -sak ³	使役化
12. 燃える／燃やす (burn)	ka:ŋ ³	ha:l ¹	補充
13. 壊れる／壊す (destroy)	ki ³ -sia ¹	su ³ -sia ¹	両極
14. 満ちる／満たす (fill)	dim ¹ [I]	dim ³ [II]	使役化
15. 終わる／終える (finish)	man ¹	man ¹ -sak ³	使役化
16. 始まる／始める (begin)	ki ³ -pan ³	pan ³	逆使役化
17. 広がる／広げる (spread)	ki ³ -zal ³	zal ³	逆使役化
18. 転がる／転がす (roll)	ki ³ -xu:k ²	xu:k ²	逆使役化
19. 発達する／発達させる (develop)	xaŋ ² tu ³	xaŋ ² tu ³ -sak ³	使役化
20. なくなる／なくす (get lost/lose)	maŋ ¹	maŋ ¹ -sak ³	使役化
21. 上がる／上げる (rise/raise)	xaŋ ² [I]	xan ³ [II]	使役化
22. 直る／直す (improve)	hoi ³	hoi ³ -sak ³	使役化
23. 揺れる／揺らす (rock)	ki ³ -lok ³	lok ³	逆使役化
24. 繋がる／繋げる (connect)	ki ³ -zom ³	zom ³	逆使役化
25. 変わる／変える (change)	ki ³ -xe:l ²	xe:l ²	逆使役化
26. 集まる／集める (gather)	ki ³ -xo:m ³	xo:m ³	逆使役化
27. 開く／開ける (open)	ki ³ -hoŋ ²	hoŋ ²	逆使役化
28. 割れる／割る (break)	ki ³ -tam ³	su ³ -tam ³	両極
29. 閉まる／閉める (close)	ki ³ -xa:k ¹	xa:k ¹	逆使役化
30. 裂ける／裂く (split)	ki ³ -ke:k ¹	su ³ -ke:k ¹	両極
31. 死ぬ／殺す (die/kill)	si: ²	t ^h at ³	補充

逆使役化に関わる接頭辞 ki³- は、項を増やす他動詞化接辞や使役の接辞と共に用いられることもある。以下の例(20)は代行態の他動詞化接辞 -sak³ と、例(21)は随伴態の他動詞化接辞 -pi³ と、例(22)は使役態の接辞 -sak³ と接頭辞 ki³- が共起する例である。以下のいずれの例文においても動作主が表示されていない。この動作主を表示しない用法については §3.3 で詳しく述べる。

9) 表中の動詞対例において、動詞語幹の形式が派生に関わっているものについては、動詞語幹の形式 I (無標の形式) のほうに [I]、形式 II (有標の形式) のほうに [II] と併記している。

- (20) $in^1 \quad a^1 \quad tun^3 \quad ciaŋ^1 \quad in^2 \quad a^3 \quad sa^1xi^2-sa^1 \quad a^1 \quad na^3- \quad ki^3-gu:k^1-sak^3 \quad hi^3$
 house 3 arrive^{II} time CNJ 3 barking.deer.meat 3 DEIC- MM-steal^{II}-AFF COP^I
 「家に着いた時には彼のホエジカの肉が誰かに盗まれてしまっていた。」(ZS003: 15)
- (21) $ko:l^2-ma:\eta^2-pa^3 \quad zi^2 \quad di:\eta^1 \quad in^2 \quad ki^3-pai^3-pi^3 \quad ta^3 \quad hi^3$
 Myanmar-king-male.OBL wife PUPR CNJ MM-go^{II}-COM PRF COP^I
 「ビルマの王の妃となるために連れて行かれてしまった。」(ZS004: 2)
- (22) $bu^3 \quad la:k^1 \quad hun^1 \quad ciaŋ^1 \quad in^2 \quad bu^3 \quad ki^3-cil^2-sak^3 \quad hi^3$
 rice take^{II} time when CNJ rice MM-thresh^{II}-CAUS COP^I
 「稲を刈り取った時は [牛に] 脱穀をさせるものである。」(ZS003: 6)

3. 用法

Kemmer (1993) は通言語的な調査の結果を基に様々な中動態の用法を挙げ、中動態標識が現れる状況のタイプを提示した。Smith (1998) は Kemmer (1993) の分類に従い、チン語支のライ語における中動態標識の形態統語的特徴と中動態の表す意味範囲を明らかにした。以下、Kemmer (1993) と Smith (1998) を参照し、ライ語の中動態標識との違いにも適宜触れながらティディム・チン語における中動態標識 ki^3 の再帰用法 (§3.1)、相互用法 (§3.2)、動作主非表示の用法 (§3.3) について述べる。

3.1. 再帰用法

動詞に接頭辞 ki^3 を付加することで、動作主と被動者が同じであり、動作主による行為が動作主自身に及ぶことを表す。例(23)の太字の部分のように、2つの同一の名詞句を接続助詞 le^3 「と」で繋げると「自分自身 (直訳: 彼と彼)」という意味の名詞句になる。こうした名詞句を用いずに、接頭辞 ki^3 の付加だけで再帰を表すこともできる (例(24)参照)。

- (23) **$a^1ma^3 \quad le^3 \quad a^1ma^3$** $ki^3-ha:n^3sua^3 \quad hi^3$
 3SG CNJ 3SG MM-encourage^I COP^I
 「彼は自分自身を鼓舞した。」(ZS003: 33)
- (24) $mi^1ha:u^3 \quad te^1 \quad in^3 \quad da:l^2-pe:k^1 \quad a^1hi^3:zoŋ^3in^2 \quad ha:k^3no^2 \quad a^1hi^3:zoŋ^3in^2 \quad \eta u:n^3-pe:k^1$
 rich.people PL ERG bronze-sheet CNJ lead CNJ silver-sheet
 $a^1hi^3:zoŋ^3in^2 \quad no:t^1 \quad \eta il^2 \quad u^3 \quad a^2 \quad tua^2 \quad to^3 \quad a^1 \quad ki^3-en^1 \quad u^3 \quad hi^3$
 CNJ rub^I polished^I PL CNJ DEM COM 3 MM-look^I PL COP^I
 「裕福な者は銅板であれ、鉛であれ、銀板であれ、綺麗に磨いてそれで自分を見た。」(ZS003: 11)

例(25)のように、動作主が自分の身体の一部に向けて行う類の再帰動作を表すこともできる。但し、その場合には項の減少が見られない。

- (25) lian³ in³ a¹ma² le² a¹ma² a² ba:n² a¹ ki³-me:k² hi:³
 PSN ERG 3SG and 3SG 3 arm 3 MM-give.message¹ COP¹
 「リアンは自分で腕をマッサージした。」(PSL)

Smith (1998) によると、ライ語の中動態標識には Kemmer (1993) が「間接的な再帰 (indirect reflexive)」と呼ぶ用法もある。この用法では、動作主が動詞によって表された行為の受益者でもあることを表している。例えば、以下の例(26)のライ語の文では、中動態標識の付加によって Van Hree という名の動作主が受益者でもあることを表している。しかし、ティディム・チン語の中動態標識 ki³-にはこのような再帰の用法が無い (例(27)参照)。

- (26) van-hree ni? vok ?aa-tsok
 Van Hree ERG pig 3SG.MM-buy^{II}
 「Van Hree <人名> は彼自身の為に豚を買った。」【ライ語の例】(Smith 1998: 8)
- (27) lian³ in³ (a¹ma:² a:¹ di:ŋ¹) vok³ lei¹/*ki³-lei¹/*ki³-lei³
 PSN ERG 3SG.OBL possession PURP pig buy¹/*MM-buy¹/*MM-buy^{II}
 「リアンは(彼自身の為に)豚を買った。」【ティディム・チン語の例】(PSL)

Kemmer (1993) は「身繕いの動作 (grooming action)」も中動態で表されうると述べている。しかし、この用法にあたるティディム・チン語の例は他動詞 sil¹「洗う」に接頭辞 ki³- を付けた自動詞 ki³-sil¹「沐浴する」の1例しか見つかっていない (例(28)参照)。

- (28) tu:i¹ siaŋ²t^hou² to?³ ki³-sil¹ di:ŋ¹
 water clean¹ COM MM-wash¹ PURP
 「清潔な水で沐浴しなければならない。」(ZS004: 46)

一方、ライ語の中動態標識は前述の通り「間接的な再帰」も表すことから、「身繕いの動作」の用法が発達している。Smith (1998) は、(a) ?aa-hriat {3SG.MM-comb^I} 「[[彼が彼自身の髪を] 梳く」、(b) kaa-rak-me?^I {1SG.MM-PRF-shave^{III}} 「[[私が私自身の毛を] 剃る」、(c) ?aa-pho?^y {3SG.MM-remove (inv.)} 「[[彼が彼自身のベルトを] 外す」、(d) ?aa-hruk {3SG.MM-put.on (shirt) (inv.)} 「[[彼が彼自身のシャツを] 着る」、(e) ?aa-fe?ⁿ {3SG.MM-put.on (sarong) (inv.)} 「[[彼が彼自身の腰巻] を穿く」などの中動態の例を挙げている (Smith 1998: 16-17)。一方、これらのライ語の

例に相当するティディム・チン語の文を見ると、全ての例で中動態標識 ki^3 -を用いることができず、ライ語の中動態標識とティディム・チン語の中動態標識との間に機能上の差異が見られた。その例の一部を以下の(29)と(30)に示す。

- (29) $ka^3 \quad xa^1mul^1 \quad ka^3 \quad me:t^1 \quad (*ki^3-me:t^1) \quad hi^3$
 I beard I shave¹(MM-shave¹) COP¹
 「私は自分の髭を剃った。」(PSL)
- (30) $taŋ^1va:l^2pa:l^1 \quad in^3 \quad a^3 \quad ko:\eta^1\eta a:k^3 \quad a^1 \quad sua\eta^3xia^3 \quad (*ki^3-sua\eta^3xia^3) \quad hi^3$
 bachelor ERG 3 belt 3 take.out¹(MM-take.out¹) COP¹
 「独身男性は自分のベルトを取り外した。」(PSL)

一方、以下の例(31)と(32)のように、Kemmer (1993) と Smith (1998) が「身体動作 (body action)」と分類するものの中で「移動を伴わない動き (nontranslational motion)」についてはライ語と同様にティディム・チン語でも中動態標識 ki^3 -を用いた例が見られた。

- (31) $pai^2 \quad suak^1 \quad \eta am^2 \quad lou^3 \quad in^2 \quad ki^3-le\eta^3 \quad ki:k^1 \quad pa\eta^3pa\eta^3 \quad hi^3$
 go¹ continuously dare¹ NEG¹ CNJ MM-return(inv.) again frequently COP¹
 「どうしても進み続けることができず、たびたび振り返った。」(ZS002: 38)
- (32) $ni^2 \quad le\eta^3 \quad xa^3 \quad le\eta^3 \quad lei^1tun^1 \quad te^1 \quad a^1 \quad ki^3-pei^2 \quad to:n^3tun^1 \quad hi^3$
 sun CNJ moon CNJ earth PL 3 MM-spin¹ always COP¹
 「太陽と月と地球は常に回転している。」(ZS004: 5)

3.2. 相互用法

Vul Za Thang & J. Gin Za Twang (1975) には、 ki^3-dem^1 {MM-compete¹} 「競いあう」、 ki^3-dou^2 {MM-attack¹} 「交戦する」、 ki^3-gum^3 {MM-save¹} 「支えあう」、 ki^3-kum^2 {MM-discuss¹} 「議論しあう」、 ki^3-lu^1 (MM-have.coitus.with.a.woman¹) 「性交する」、 $ki^3-t^h at^3$ {MM-kill¹} 「殺し合う」、 ki^3-zom^3 {MM-connect¹} 「繋がる」等、相互の動作を表す例が多数挙げられている (Vul Za Thang & J. Gin Za Twang 1975: 51-53)。

§3.1の再帰用法の例(24)と相互の動作を表す例(33)の述部はどちらも $a^1 \quad ki^3-en^1 \quad u\eta^3$ {3 MM-look¹-PL} であり、同一形式である。その為、この述部だけが単独の文として発話された場合、文脈が与えられない限り、それが再帰用法なのか、相互用法なのかは判然としない。

- (33) tua² nu³ŋa:k¹nu:¹ te:¹ (xat³ le[?]³ xat³) a¹ ki³-en¹ u[?]³ hi:³
 DEM maiden PL one CNJ one 3 MM-look¹ PL COP¹
 「その女の子たちは互いに見つめあった。」(PSL)

相互の動作だけでなく、相互の関係を表すこともある。相互の関係を表す動詞の例としては、ki³-baŋ³ {MM-alike¹} 「互いに似る」、ki³-gam²la:¹ {MM-far¹} 「互いに遠い」(例(34)参照)、ki³-kim¹ {MM-equal¹} 「等しい」、ki³-lem² {MM-calm¹} 「平和だ」、ki³-na:i¹ {MM-near¹} 「互いに近い」、ki³-te:ŋ¹ {MM-live¹} 「結婚する」等が挙げられる。

- (34) tu:i¹ om³ -na:² mun³ xat³ le[?]³ xat³ tai² tam¹pi:¹ a¹ ki³-gam²la:¹ hi:³
 water present^{II} -NMLZ place one CNJ one mile many 3 MM-far¹ COP¹
 「水のあるところは互いに何マイルも遠く離れている。」(ZS002: 8)

相互の動作および相互の関係における参加者は、再帰用法の場合と同様に、2つの名詞句を接続助詞 le[?]³「と」で繋いで表す(例(35)参照)か、例(36)のように参加者の一方を表す名詞句に共格助詞 to[?]³を付加して表す。

- (35) ni¹daŋ¹la:i² in³a[?]³ gam²sa:¹ te:¹ le[?]³ va¹sa:¹ te:¹ a¹ ki³-dou² u[?]³ hi:³
 once.upon.a.time CNJ animal PL and bird PL 3 MM-attack¹ PL COP¹
 「昔々、動物たちと鳥たちは互いに攻撃しあっていた。」(ZS002: 36)
- (36) kei¹ to[?]³ i¹ ki³-mu[?]³ ma¹-teŋ² kua³ ma[?]³ to[?]³ ki³-hou² kei¹ un³
 1SG COM 1PL.INCL MM-see^{II} before-PL who EMPH COM MM-talk.to^I NEG PL.IMP
 「私と会う前は誰とも話すな。」(ZS004: 67)

3.3. 動作主非表示の用法

はじめに、接頭辞 ki³-の付加によって、対応する他動詞文(または自動詞文)よりも結合価が1つ減り、動作主項が表示されなくなる場合について述べる。すなわち、他動詞節から自動詞節への派生だと考えれば、派生後のSが派生元の他動詞文のOに相当し、派生元の他動詞文のAが明示されなくなる類の受動と言える。Dixon and Aikhenvald (2000: 7-8)の定義に従えば、[1]動作主との関与は示唆するが動作主項自体は表示しない受動(agentless passive)と[2]動作主による行為という示唆もなく自発的にその状態になったことを表す逆使役(anticausative)の2種類のタイプがあるが、本節では[1]のタイプについて述べる。以下の例(37) b.は動作主を非表示にした受動文であり、a.はそれに対応する能動文である。

- (37) a. $ka^3 pa:1 in^3 ta:\eta^2 le?^3 va:i^2mi:m^2 a^2 ci:\eta^2 hi:3$
 1 father ERG millet CNJ corn 3 cultivate^I COP^I
 「私の父は粟と玉蜀黍を栽培した。」(ZS001: 25)
- b. ($*ka^3 pa:1 in^3$) $ta:\eta^2 le?^3 va:i^2mi:m^2 a^1 ki^3-ci:\eta^2 hi:3$
 1 father ERG millet CNJ corn 3 MM-cultivate^I COP^I
 「粟と玉蜀黍が栽培されている。」(PSL)

接頭辞 ki^3 の付加によって他動詞節の O が自動詞節の S になることは、名詞修飾における文法現象を見ても分かる。名詞修飾節の述部に現れる動詞の語幹形式はその名詞修飾節と被修飾名詞との統語的關係によって交替する (大塚 2020: 303)。被修飾名詞が名詞修飾節中の主語にあたる場合は例(38)a.のように形式 I の動詞語幹が用いられ、被修飾名詞が名詞修飾節中の目的語など、主語にあたらぬ場合には例(38)b.のように形式 II の動詞語幹が用いられる。

- (38) a. $xuai^2 a^2 zo\eta^2-zo\eta^2 a^3 nu:1$ 「蜂を探し回っていた彼の母」
 bee 3 search^I-search^I 3 mother (Otsuka 2014: 135)
- b. $ka^2 sial^2 go?^3$ 「私が屠ったミタン牛」
 1 mithan slaughter^{II} (Henderson 1965: 88)

例(39)a.を見ると、被修飾名詞が名詞修飾節中の目的語にあたる為、名詞修飾節中の動詞が形式 II の動詞語幹で現れている。しかし、その動詞に接頭辞 ki^3 - を付加した b. では被修飾名詞が名詞修飾節中の主語になる為、名詞修飾節中の動詞は形式 I の動詞語幹で現れる。

- (39) a. $lou^2pa:1 a^1 xo?^3xiat^1 sa:1 te:1$ 「彼が既に引き抜いた草」
 grass 3 weed.out^{II} already PL (Henderson 1965: 86)
- b. $lou^2pa:1 a^1 ki^3-xou^1xia^3 sa:1 te:1$ 「既に引き抜かれた草」
 grass 3 MM-weed.out^I already PL (Henderson 1965: 86)

接頭辞 ki^3 の付加による二重他動詞から単一他動詞への派生も見られる。例(40)b.の単一他動詞の文に対応する二重他動詞の文が例(40)a.である。例(40)b.は法廷というフォーマルな場面において、死刑宣告をした際の裁判官の発言である。

- (40) a. $t^hu^1-xen^2 te:1 in^3 tua^2 pa:1 si?^3.da:n^2 a^3 pia^1 u?^3 hi:3$
 matter-judge^I PL ERG DEM male die^{II}-punishment 3 give^I PL COP^I
 「裁判員らはその男に死刑判決を下した。」(PSL)

- b. tua² pa:¹ si?³-da:n² ki³-pia¹ hi:³
 DEM male die^{II}-punishment MM-give^I COP^I
 「その男は死刑に処される！」(ZS003: 29)

Kemmer (1993) が“impersonal”と呼ぶ用法 (Kemmer 1993: 147-149, 268) は、動作主非表示の用法の一種としてティディム・チン語でよく用いられる。例(41)から例(44)は、どれも動作主項が明示されておらず、一般的な事柄を表している。例(43)や例(44)のように、自動詞に接頭辞 ki³- を付加することもある。

- (41) tu³-hon¹ a¹ ke:m³ te:¹ tu³-ciŋ¹-pa:¹ ki³-ci:³ hi:³
 sheep-crowd 3 keep^I PL sheep-pasture^I-male MM-say^I COP^I
 「羊の群れを見張る者たちは『羊飼』と [人々に] 言われている。」(ZS003: 1)
- (42) xua²-lum³-na:² gam² a?³ tu:³ ki³-xo:i² lou³ hi:³
 weather-warm^{II}-NMLZ country LOC sheep MM-breed^I NEG^I COP^I
 「[普通, 人は] 暑い国で羊を飼育しない。」(ZS003: 1)
- (43) to:l³ŋa³ lou³ in² na:k²-suk³ na:k²-tou³ in² ki³-om¹ hi:³
 rest^I NEG^I CNJ breathe^I-downward (inv.) breathe^I-upward^I CNJ MM-exist^I COP^I
 「休まずに、息を吐いたり吸ったりしていること。」(ZS004: 47)
- (44) xua²dou² xit³ ciŋ¹ in² sa:ŋ¹ ki³-ka?³ ki:k¹ pa?³ hi:³
 Khuado finish^{II} time CNJ school MM-climb(inv.) again immediately COP^I
 「クアドウの祭りが終わるとすぐにまた [我々は] 学校に行く。」(ZS002: 28)

4. まとめと今後の課題

本稿では文語体のティディム・チン語における中動態標識 ki³- の形態統語的な特徴とその主な用法について述べた。本稿で挙げた再帰用法, 相互用法, 動作主非表示の用法以外にも中動態標識 ki³- が表す用法はあると考えられる。例えば, Smith(1998) によると, ライ語の中動態標識は使役標識と共に「(誰かを惑わすため) 何かをするふりをする」という意味を表すことがあると述べているが, ティディム・チン語でも例(45)のように何かのふりをするを表す際中動態標識を用いることがある。

- (45) baŋ³ ha:ŋ¹ in² a² na:u²-pa:¹ lam¹pi:¹ a?³ na¹- ki³-si?³ bo:l² hiam³
 what reason CNJ 3 brother-male road LOC DEIC- MM-die^{II} do^I Q
 「なぜ彼の弟は路上で死んだふりをしていたのか？」(ZS002: 49)

今後は文語体だけでなく口語体も考察の対象に含めながら、ティディム・チン語の中動態標識が表す様々な用法について調査を進め、より包括的な記述を行いたいと考えている。

本稿におけるティディム・チン語の表記方法

ティディム・チン語にはラテン文字による正書法があるが、正書法の表記では声調を示さない。また、音韻上は母音の長短が弁別的だが、文字の上ではそれを区別せずに書くことが多い。本稿ではティディム・チン語の音韻の実態になるべく即した形で表記する為、正書法に基づいた表記ではなく、Henderson (1965: 9-14) の音素表記を基にした以下の音素表記を用いる。

ティディム・チン語の音節構造は (C1)V(C2)/T と表すことができる (丸括弧で囲んだ要素は非必須要素である)。頭子音 (C1) に現れうる音素に /p, t, k, b, d, g, p^h, t^h, s, x[x~k^h], h, c[te], v, z, l, m, n, ŋ/ があり、末子音 (C2) に現れうる音素には /m, n, l, ŋ, p, t, k, ʔ, lʔ/ がある (但し、借用語やオノマトペなどには /c^h[t^h], j[dz], f/ という子音も現れることがある)。母音 V の位置に現れうる単独母音には /i, i:, e[e/ε], e:[ε:], a, a:, o[o/ɔ], o:[ɔ:], u, u:/ があり、短母音音素の /e/ と /o/ は音節の末尾または声門閉鎖の末子音 /ʔ/ の前に現れる場合、[ε] と [ɔ] という音声で実現する。このほか、V には二重母音 /ia, ua, iu, i:u, ei, ei:[ei:], eu, e:u[ε:u], ai, a:i, au, a:u, oi, o:i[ɔ:i:], ou, ui, u:i/ や三重母音 /iai, uai, iau, uau/ が現れることもある。声調素には 3 種類ある。本稿では Henderson (1965: 19-20) の声調に関する記述を参考にして、各音節末に「第 1 声調」, 「第 2 声調」, 「第 3 声調」という声調記号を付して表す¹⁰⁾ (Henderson 1965: 19-20)。

略語一覧

1: 1st person, 2: 2nd person, 3: 3rd person, ¹: tone 1, ²: tone 2, ³: tone 3, -: morphological boundary, ^I: form I (verb stem), ^{II}: form II (verb stem), A: agent-like argument of canonical transitive verb / transitive subject, ABL: ablative, AFF: affected object (benefactive/malefactive/substitutive), C: consonant, CAUS: causative, CNJ: conjunction, COM: comitative, COP: copula, DEIC: deictic marker, DEM: demonstrative, EMPH: emphasis, ERG: ergative, IMP: imperative, INCL: inclusive, inv.:

10) ティディム・チン語における声調は 2 種類の音節に分けて記述する必要がある。以下、(a) 短母音で終わる閉音節、(b) 短母音と無声の末子音 -p, -t, -k で終わる閉音節、(c) ʔ で終わる閉音節という 3 つのタイプの音節を「短い音節」と呼び、その他の音節を「長い音節」と仮に呼ぶことにする。単音節のレベルで見ると、長い音節の第 1 声調は上昇 [1], 第 2 声調は平板 [1], 第 3 声調は下降 [V] の音調曲線で現れる。一方、短い音節の第 1 声調は高音 [1], 第 3 声調は低音 [1] で実現する。語や句が連続する場合、連続変調が生じることもあり、1 つの声調素が条件によって様々な音調曲線で実現することになる。例えば、第 2 声調の長い音節の後に第 3 声調が続くと、その第 3 声調は長い音節の場合高音からの下降 [V], 短い音節の場合高音 [1] のピッチで現れる。また、上昇の音調曲線が連続して現れる場合は後部を高く平らな音調曲線 [1] で発音し、下降の音調曲線が連続して現れる場合は後部を低く平らな音調曲線 [1] で発音する傾向がある。この他、第 2 声調の長い音節の母音が短母音化する場合は第 1 声調になる等といった声調交替や、句や節の単位で起こる様々なイントネーションもあるが、ティディム・チン語の音韻に関して詳しくは Henderson (1965) を参照されたい。

invariant verb (動詞語幹の形式 I と形式 II の区別が無いタイプの動詞), IRR: irrealis, LOC: locative, MM: middle marker, NEG: negative, NMLZ: nominalization, OBL: oblique, P: patient-like argument of canonical transitive verb, PL: plural, PRF: perfective, PSL: Pau Sian Lian (the main consultant's name), PSN: person's name, PURP: purposive, Q: question, REFL: reflexive, RELINQ: relinquitive, S: single argument of canonical intransitive verb / intransitive subject, SG: singular, T: tone, V: vowel / verb, VEN: venitive, vi: intransitive verb, vt: transitive verb, ZS: Zolai Simbu (Tedim/Tiddim Chin Primer).

謝辞

本調査のコンサルタントであり、私の大切な友人でもあるパウシアンリアン氏 (Pau Sian Lian) に心より感謝の意を表します。本研究は、JSPS 科研費 17K13442, 18H03599, 20H01256, 21K00480の助成を受けています。

参考文献

- Davis, Tyler (2017) *Verb stem alternation in Sizang Chin narrative discourse*. Payap University M.A. thesis.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) (2000) *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2019) *Ethnologue: Languages of Asia*. Twenty-second edition. Dallas: SIL International.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and transitivity*. 87-120. Amsterdam: John Benjamins.
- Henderson, Eugénie J. A. (1965) *Tiddim Chin: A Descriptive Analysis of Two Texts*. (London Oriental Series, 15.) London: Oxford University Press.
- Hillard, Edward J. (1974) Some aspects of Chin verb morphology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 1 (1): 178-185.
- Kato, Atsuhiko (2019) The middle marker in Pwo Karen. *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies* 50: 21-62.
- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins.
- LaPolla, Randy J. (2000) Valency-changing derivations in Dulong/Rawang. In: R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*, 282-311.

- Cambridge: Cambridge University Press.
- Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- 西田龍雄 (1989) 「チン語支」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典 世界言語編 (中)』 2: 995-1008. 東京: 三省堂.
- Otsuka, Kosei (2014) Tiddim Chin. In: Toshihide Nakayama, Noboru Yoshioka & Kosei Otsuka (eds.) *Grammatical Sketches from the Field 2*: 109-141. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 大塚行誠 (2020) 「ティディム・チン語の名詞修飾表現」 プラシヤント・パルデシ・堀江薫 (編) 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 303-322. 東京: ひつじ書房.
- Otsuka, Kosei (2022) Directional Prefixes in Tiddim Chin. In: Shintaro Arakawa & Takumi Ikeda (eds.) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages (Function of Directional Prefixes) 3*: 197-210. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
- Palmer, F. R. (1994) *Grammatical Roles and Relations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peterson, David A. (1998) The morphosyntax of transitivity in Lai (Haka Chin). *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21 (1): 87-153.
- (2022) ‘RETURN’ > MIDDLE: an areal grammaticalization in Northern South Central Tibeto-Burman*. Paper presented at the 55st ICSTLL (International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics), Kyoto University (Online), Japan.
- Smith, Tomoko Yamashita (1998) The middle voice in Lai. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 21 (1): 1-52.
- Takahashi, Yoshiharu (2012) On a middle voice suffix in Kinnauri (Pangi dialect). In: Wataru Nakamura & Ritsuko Kikusawa (eds.) *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*. Senri Ethnological Studies 77:157-175.
- VanBik, Kenneth (2009) *Proto-Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages*. (STEDT Monograph Series #8). Berkeley: University of California.
- Vul Za Thang & J. Gin Za Twang (1975) *Chin-English Dictionary (Tiddim Chin)*. Tedim: s.n.
- Zam Ngaih Cing (2017) A descriptive grammar of Tedim Chin. Ph.D. Dissertation, North-Eastern Hill University.

言語資料：初等読本

本調査で用いた幼稚課程および小学課程向けの初等読本5冊を以下の[1]から[5]に示す。これらの読本から例を引用する場合には各資料のIDとページ番号を併記した。

- [1] 幼稚課程用のティディム・チン語読本（本稿における資料ID：ZS000）
Zolai Simbu Komiti (1972) ZOLAI SIMBU: TAN LANG (Sinna). Yangon: s.n.
- [2] 小学課程第一学年用のティディム・チン語読本（本稿における資料ID：ZS001）
Zolai Simbu Komiti (1972) ZOLAI SIMBU: TAN KHAT (Sinna). Yangon: s.n.
- [3] 小学課程第二学年用のティディム・チン語読本（本稿における資料ID：ZS002）
Zolai Simbu Komiti (1972) ZOLAI SIMBU: TAN NIH (Sinna). Yangon: s.n.
- [4] 小学課程第三学年用のティディム・チン語読本（本稿における資料ID：ZS003）
Zolai Simbu Komiti (1987) ZOLAI SIMBU: TAN THUM (SINNA). Tedim: s.n.
- [5] 小学課程第四学年用のティディム・チン語読本（本稿における資料ID：ZS004）
Zolai Simbu Komiti (1987) ZOLAI SIMBU: TAN LI (SINNA). Tedim: s.n.